

創世記 1章 1-2章 3節

コリントの信徒への手紙二 13章 11-13節

マタイによる福音書 28章 16-20節

先週は聖霊降臨日の礼拝を多くの皆さまとお祝いし、また礼拝後楽しいひと時を持てましたこと、主なる神様に感謝したいと思います。ご用意と当日ご尽力頂きました皆さま、ありがとうございます。

台風二号が通り過ぎましたが、2020年から育ち始めていた1階入り口付近にある「からしだねの木」が折れてしまいました。残念ではありますが、それ以外の被害はありませんでした。

さて、先週の聖霊降臨の出来事において、わたしたちがご一緒に確認いたしましたことは、この世界の初めから聖霊を通して存在する、主なる神様の愛でした。本日は、その愛を三位一体的に受け止めることが大切を改めて学びたいと思います。

三位一体という事柄は、父なる神、子なる神、聖霊なる神、これら三つが一つであるという、教会の大切な教え・教義です。しかし、三位一体とは何かを説明するのは大変です。教会の長い歴史の中で、たくさんの方が三位一体論という神学を語っています。しかし、なぜ三位一体なのか、ということには、単純に答えられます。それは、天地を創造された主なる神様が、イエス様の十字架と復活をとおしてなされた出来事が、今も聖霊を通して私たちに臨んでいるということ、人間が理解するには、三位一体という表現で理解するしかないからです。

この三位一体の教えですが、『聖書（旧約）』には、記されていません。『聖書（新約）』にも、明確に記されていません。しかし、『聖書（旧約）』を大切にしていた初代教会の人々は、本日の日課である創世記の冒頭に、その証を見出していたと思います。

創世記は、「初めに神は天と地を創造された。地は混沌として、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた」（創 1: 1-4）とはじまります。この部分は、主なる神様が天地を創造され、最初に告げています。しかし、神の霊は、すなわち聖霊は、最初から作られることなく、水の面を動いていたとも述べているのです。次に「言われた」とある通り、言（ことば）をとおして主なる神様は「光あれ」といわれます。つまり、主なる神様と、神様の霊、そして神様の言、これらの三つは、「光あれ」と光が誕生する前から、存在していたのです。言によって最初に作られたものは、「光」でした。そしてその「光」が存在するようになったことを見て、主なる神様は最初に「良しとされた」のです。この時点で、天地創造の神様、その神様と共

にある聖霊、そして言葉であり光であるイエス様の存在がすべて含まれているのです。

創世記のこの箇所において、主なる神様は、このあと五回、合計で六回造られたものを「**良しとされた**」と述べます。そして最終的に「**神は、造ったすべてのものを御覧になった。それは極めて良かった。**」（創 1：31）とすべてを良しとされます。つまり、最初にある父と子と聖霊なる信仰に立ち返る時、その歩みは、すべてが「良し」とされる世界につながる、初代教会の人々は、そのように見出したと思います。

創世記をこのように、イエス様や聖霊を含めながら読み解くことは、ユダヤ教の人々にとっては、受け入れられないことかもしれません。また神様の唯一性を強調する、イスラム教の人々にとっても、受け入れられないことかもしれません。しかし、すべての最初に主なる神様がおられること、そのことを信じているという点において、わたしたちもユダヤ教もイスラム教も同じであると思います。それゆえに、イエス様も聖霊様も同じと意識せず、主なる神様だけを見つめて、真摯にあゆみつづけることも、世界を主なる神様の「良し」とされた状態に戻す歩みにつながるのでしょうか。しかし、わたしたちは、イエス様の十字架と復活を通して示された愛を通して、その歩みを行うのです。なぜならば、そのように歩むことのほうが、より多くの人に、またより優しい気持ちで、主なる神様のよしとされた世界に戻る歩みとなると信じるからです。

人類の歩みにおいて、科学は発達し続け、歴史を学ぶ大切さも主張され続けています。しかし、人類は、この世界の始まりについて、あるいはその終わりについて、解明したわけではありません。それゆえ、人間は、時間を意図的に区切り、初めと終わりを設け、神話を記し、歴史を記し、思想を生み出し、また科学を用いてきました。そして過去と現代を自己の主張と目的の範囲内で理解し、未来を目指し、秩序、制度、常識を構成し、文化を育ててきました。しかし、それら生み出されたものの相違、あるいは複雑な絡み合うことによって、今、対立が起こっているといえます。『聖書』の語る内容も、それらの文化の一つです。『聖書』は一つの答えをわたしたちに示していると思います。それは、世界がどれほど混乱の中にあっても、最初に主なる神様が「よし」とされた「光」があると信じる時、わたしたちを根本から支えて下さる主なる神様から希望を得るといことです。

昨日、教会を支えてくださっていた一人の兄弟を天国にお送りしました。この地上でのお別れがありましたが、それは天国で再会するまでの、希望の時の始まりでもあります。地上での別れの悲しみは、すぐには慰められません。しかし、主なる神様が、愛をもって、その希望をイエス様によって私たちに教えてくださったことを、祈りながら聖霊を通して、ご一緒に確信したいと思います。